

太宰治と「ウキスキイ」をめぐる物語

——「親といふ二字」と「親友交歓」と、ときどき「パンドラの匣」——

高塚 雅

はじめに

本稿では太宰治の戦後の作品、「親といふ二字」（『新風』昭和二十一年一月）と「親友交歓」（『新潮』昭和二十一年十二月）を主にとりあげる。論じられることが少ないこの二作品だが、「ウキスキイ」をキーワードとして併せて読むと、作品間のつながりが見えてくる。そこで、太宰の書簡や当時の物価、津島美知子の証言等を参照しつつ、この二作品を読解し、戦中戦後の太宰と「ウキスキイ」をめぐる状況をみていこうと思う。

「親といふ二字」と「親友交歓」——「ウキスキイ」の来し方行く末——

「はじめに」で示したとおり、発表は「親といふ二字」が先行するが、論旨の都合上、まず「親友交歓」に言及

する。「親友交歓」は、太宰が疎開していた郷里の金木から東京の三鷹に戻ってすぐに発表された作品の一つである。作品の梗概として、『太宰治大事典』（志村有弘／渡部芳紀編 勉誠社、平成十七年一月）の「作品篇」より当該箇所を引用する。

【内容】 自称小学校時代の親友という男の突然の訪問を受け、それが私の記憶に消し難い痕跡を残す。それ程その男は、見事あつぱれであった。私は人間の新しいタイプさえ予感する。クラス会の相談に来たというその男は、この敗戦後の、酒を入手しにくい時期に、まず「かかのお酌で一杯飲ませろ」と強要し、秘蔵の高価なウイスキーを平然と茶碗で飲み、つまらない、不愉快な、人の弱みに付け込む、浅ましい話をし、私の兄の選挙を応援したと恩に着せ、私の家をこき下ろし、自分は貴族の出だと自慢し、私の妻に無神経な言葉を吐き、タバコとウイスキーの最後の一本を取り上げ、あげくに耳元で「威張るな！」言い放ち、帰る。しかも、私はこの大男の暴れることを恐れ、毅然ともせず、ひたすら機嫌を損ねないように努めていただけなのである。

（槌賀七代）

「親友交歓」の記述に、「とにかくそれは、見事な男であつた。あつぱれな奴であつた。好いところが一つもみぢんも無かつた」とあるように、この「小學校時代の親友」＝「平田」の傍若無人の振る舞いは凄まじいし、相当辛辣に描かれている。この「平田」が鯨飲していったのが当時は相当高価な代物であつた「ウキスキー」である。

飲ませろ、と言はれた時には、あいにく日本酒も何も無かつたので、その残り少なの秘蔵のウキスキーを出したのであるが、しかし、こんなにかぶがぶ鯨飲されるとは思つてゐなかつた。甚だケチ臭い愚痴を言ふやうだが、（いや、はつきり言はう。私はこのウキスキーに關しては、ケチである。惜しいのである）まるで何か當然の事のやうに、大威張りでぐいぐい飲まれては、さすがに、いまいましい氣が起こらざるを得なかつたので

ある。

(「親友交歓」)

右の引用に見られるように、作中の「私」はこの「ウキスキイ」への執着を隠さない。それもそのはずで、「私」はかなり無理をしてこの「ウキスキイ」を入手したのである。

けれども、そのウキスキイは、謂はば私の秘藏のものであったのである。昔なら三流品でも、しかし、いまではたしかに一流品に違ひなかつたのである。値段も大いに高いけれども、しかし、それよりも、之を求める手裏てづるが、たいへんだつたのである。お金さへ出せば買へるといふものでは無かつたのである。私はこのウキスキイを、かなり前にやつと一ダアスゆづつてもらひ、そのために破産したけれども後悔はせず、ちびちび嘗めて楽しみ、お酒の好きな作家の井伏さんなんかやつて來たら飲んでもらうとかかなり大事にしてゐたのである。しかし、その時には、押し入れに、二本半しか残つてゐなかつたのである。

(「親友交歓」 傍線は引用者、以下も同様)

結局は物語の結末で、「平田」に「威張るな！」と言い放たれた上に、最後の一本の「ウキスキイ」も取り上げられてしまう。

ところで、「小學校時代の親友」に取り上げられた「ウキスキイ」には来歴がある。それを描いた作品が「親といふ二字」である。この「親といふ二字」は、「私」と郵便局で知りあいになつた「爺さん」との奇縁を描いた作品であるが、その核心となるのが「ウキスキイ」だつた。「親友交歓」と同じく、「親といふ二字」の梗概として、『太宰治大事典』の「作品篇」より当該箇所を引用する。

【内容】親という二字と無筆の親は言い、という川柳を私が思い出したのは、郵便局で無筆のお爺さんと知り合いになつたからである。顔が合う度に頼まれて、払い戻し用紙に記入する額は、決まって四拾円。通帳は空

襲で死んだ二十六の末娘のもので、四拾円はその日のうちに飲んでしまふのだと言う。ある日、私はウイスキー購入のために預金をおろしに行き、れの爺さんが入金した末娘の死亡保険金の札束をそのまま窓口で受け取るはめになる。その保険金でウイスキーを買ったようなものだと言つて女房に語ると、作り話だと言つて相手にしてくれない。

(安田義明)

「ウイスキーを十本ばかりゆづつてもらへるあてがついて、そのお禮には私の貯金のほとんど全部が必要のやうであつた」。(「親といふ二字」)そこで金を下ろしに郵便局に行くが、そこに顔馴染みの「爺さん」がいた。「爺さん」は、ようやく下りた保険金を、空襲で死んだ「末娘」名義で入金するという。そして「私」が窓口で「手渡された札束は、何の事はない、たつたいま爺さんの入金した札束そのもの」だった。「私」はその金で「ウイスキー」を入手したのである。つまり「私」が入手したこの「ウイスキー」には「二十六歳の処女のいのちが溶け込んでゐる」のだ。そのような経緯もあつて、その後「親友交歓」で、その「ウイスキー」を強奪した自称「小學校時代の親友」||「平田」を、あのように辛辣にこきおろすのだ。言わば「平田」に筆誅を加えたのである。

さてこのように、「破産」して「やつと一ダアスゆづつてもら」つた「親友交歓」の「ウイスキー」と、「親といふ二字」の「お禮には私の貯金のほとんど全部が必要」な「ウイスキー」が同じであるとしたら、この二作品は、「ウイスキー」入手の経緯とその末路を描いた連作と読むことができようである。

もちろんこの二作品は連作を意図して創られたものではない。そもそもこの二作品の「私」が同一人物で、しかも作者太宰治その人であるという保証はない。しかし「ウイスキー」をめぐる、太宰の周りで当時「親といふ二字」「親友交歓」に見られるような出来事があつたことも事実らしい。以下、この時期の太宰の年譜・書簡等を参照して、太宰と「ウイスキー」の関わりを見ていこう。

サントリイウイスキーについて — 「白札」か「角瓶」か —

昭和二十年三月末、妻子を甲府にある妻の実家に疎開させて、太宰は一人東京に残った。その直後の四月二日未明、三鷹の街が空襲される。太宰宅はほとんど被害を受けなかったらしいが、さすがに危険を感じたのか、太宰も甲府に疎開した。しかしその甲府も七月六日未明に空襲に遭い、妻美知子の実家である石原家は全壊した。度重なる罹災に太宰は自分の郷里である金木への疎開を決意し、出発の準備が整うまで、太宰たち一家は石原家と懇意であった大内勇方に寄宿することになった。その当時を回顧して、「酒飲みというものはふしぎなもので、こんな焼野原の、どこで飲んでくるのか、大内家にいる間も、毎夜酔って帰っていた」（津島美知子「疎開前後」『回想の太宰治』人文書院、昭和五十三年五月）と呆れ気味な美知子の証言があるとおり、太宰は相当な酒好きだった。^(注1) そんな太宰が金木に疎開中、井伏に次のような手紙を出している。便宜上、本稿ではこの書簡を「井伏宛書簡A」とする。

（以下、書簡に関しては『太宰治全集12』^(注2)（筑摩書房、平成十一年四月）から引用）

A 【昭和二十年月日不詳 青森県金木町 津島文治方より 広島県深安郡加茂村 井伏鱒二宛】

：（前略）：お酒、タバコ、そちらは如何ですか。こちらは、日本酒一升五十円、ウヰスキー、サントリイ級一本百円ならば、どうにか手にはひるやうです。：（後略）：

傍線で示した「ウヰスキー、サントリイ級一本百円」であるが、これは物資の乏しい戦後すぐの、しかも金木で入手できる値段で、当然ながら小売標準価格ではない。この後、この「ウヰスキー、サントリイ級」はわずかの間に高騰する。太宰の竹村坦宛書簡を次に挙げる。本稿ではこの書簡を「竹村宛書簡」とする。

【昭和二十年十一月日付不詳 青森県金木町 津島文治方より 東京都本郷区元町一ノ一五 竹村坦宛】

拜復 御家族御一同御無事の由、大慶に存じます。イヤハヤひどいめに逢ひました。互ひに顔を見合わせて一笑といふところです。来年は東京で飲みませう。ウヰスキイ二、三本リュツクに入れて上京します。

こちらはお酒はたくさんあります。清酒一升百円くらゐ、サントリイ級と称するウヰスキイ一本二百円くらゐです。…(中略)…

それから、印税、もしすぐ送つていただけるなら、そのやうにお願いします。何せ、田舎の欲張りどもを相手にして、酒を買ひ、煙草を仕入れるのですから、いやもう、お金がかかる事、むしろ気味のいいくらゐです。

…(後略)…

傍線を引いて示したとおり、わずかの数ヶ月間に「サントリイ級と称するウヰスキイ」が百円から二百円、すなわち倍の価格になっている。

ところで太宰はどのウヰスキイを指して、「サントリイ級」の「ウヰスキイ」と手紙に書いたのでしょうか。更に言えば、「サントリイ級」の「ウヰスキイ」と言われて、当時の人々はサントリーのどの銘柄のウヰスキイを思い浮かべたのであろうか。そこでその手掛かりを得るため、「親といふ二字」「親友交歓」発表の年である昭和二十一年までのサントリーウヰスキイの歴史を概観していこう。

「赤玉ポトワイン」(明治四十年)で成功を収めた「壽屋洋酒店」(現サントリー、以下「壽屋」)が最初に発売したウヰスキイは明治四十四年の「ヘルメス」であった。しかし、創業者鳥井信治郎はその出来に満足できなかったという。次に発売されたのが、大正八年の、現在もその銘柄が残る「トリスウヰスキイ」であるが、この「トリスウヰスキイ」は仕込みで造られたものではなく、古い葡萄酒の樽に詰めたまま放置していたリキュール用のアルコールが熟成して出来た偶然の産物で、すぐに売り切れてしまった。よって、現在も飲まれている「トリスウヰス

キー」と銘柄は同じだが別物である。大正十二年、「壽屋」は大阪府三島郡島本村大字山崎にウイスキー製造用の工場建設に着手し、翌年より、本格的に国産ウイスキー製造に取り組んだ。だが、ウイスキー造りには莫大な先行投資がかかる。工場建設等の設備投資は勿論、ウイスキーが商品になるまでには原酒を樽詰めして数年寝かせておかなければならず、仕込んだウイスキーが商品になって利益を生むようになるまでには最低でもそれだけの時間がかかり、利益のでない間も仕込みは続けられる。しかも仕込んだウイスキーが売れる保証はない。当然、社内でウイスキー製造に異議を唱える者が相当数でたが、^(注4)それでもウイスキー造りは実施された。こうした苦勞の末に、昭和四年に売り出されたのが国産初の本格ウイスキー「サントリーウイスキー白札」(以下「白札」)である。この時初めて商品名として「サントリー」が使われた。「サントリー」の「サン」は、「壽屋」の主力商品である「赤玉ポトワイン」の「赤玉」を太陽に見立てての「SUN」で、「トリー」は鳥井信治郎の「トリー」である。つまり、「サントリー」をウイスキーと同義の商標(記号)にしようと昭和四年の「壽屋」は意図していたのである。ウイスキーに対する「壽屋」の並々ならぬ思い入れが伺われる。しかし、満を持して発売された「白札」は、「焦げ臭い」「煙臭い」等評判が芳しくなく、売れなかった。そこで普及用として昭和五年に「サントリーウイスキー赤札」が投入されたが、これも売れない。昭和六年には、ついに資金が底をつき、仕込みが出来ないという事態にまで追い込まれてしまう。そのような悪戦苦闘の中、昭和十二年「サントリーウイスキー12年もの角瓶^(注5)(亀甲形)」(以下「角瓶」)が発売される。この「角瓶」は非常によく売れ、昭和十四、五年頃には原酒の不足が心配されるまでになった。「壽屋」は「角瓶」をもって、やっとウイスキーでの成功を見ることができたのである。続いて「壽屋」は、昭和十五年に「サントリーウイスキーオールド」を製造したが、時局柄発売を見合わせざるを得ず、市場には出されなかつた。^(注6)昭和十八年「壽屋」は軍納品として海軍に特製品「サントリーウイスキー(イカリ印)」^(注7)を納入。終戦を

迎えた時には、さいわいにも山崎工場は戦災の被害を免れ、避難させていた原酒も無事であった。そこで「壽屋」はGHQと直接交渉し、ウイスキーの売り込みをはじめ。昭和二十年十月、GHQよりウイスキー納入の指令が届き、米軍GI用のウイスキー「ブルーリボン」^(注8)が発売された。昭和二十一年四月、「壽屋」は新生「トリスウイスキー」(以下「トリス」)を発売する。このウイスキーも好評で、「壽屋」のウイスキーの代表的銘柄となる。

「トリス」が登場する戦後まで辿ったが、では太宰ほどのウイスキーを指して「サントリイ級」の「ウキスキイ」と書いたのであろうか。「トリス」はこの書簡の時点では発売前で候補から外れる。^(注9)よって「白札」か「角瓶」が太宰の言う「サントリイ級」の「ウキスキイ」となる。そこで、この両者の小売標準価格を比較してみる。^(注10)

| 「白札」 | | 「角瓶」 | |
|------------|--------|------------|--------|
| 昭和四年(発売時) | 四円五十銭 | 昭和十二年(発売時) | 八円 |
| 昭和十五年(四月) | 四円二十四銭 | 昭和十五年(四月) | 五円二十六銭 |
| 昭和十五年(十一月) | 四円二十銭 | 昭和十五年(十一月) | 五円三十銭 |
| 昭和十六年 | 五円八十七銭 | 昭和十六年 | 七円三十三銭 |
| 昭和十八年 | 十一円四十銭 | 昭和十八年 | 十八円 |
| 昭和十九年 | 二十円 | 昭和十九年 | 三十六円 |
| 昭和二十年 | 二十八円 | 昭和二十年 | 五十円 |
| 昭和二十一年(一月) | 三十三円 | 昭和二十一年(二月) | 六十五円 |
| 昭和二十一年(三月) | 四十四円 | 昭和二十一年(三月) | 九十円 |
| 昭和二十一年(九月) | 七十三円 | 昭和二十一年(九月) | 百三十円 |

この両銘柄の価格には「サントリイ級」の「ウキスキイ」で一括りに出来ないほど開きがある。特に昭和十八年以降の「角瓶」の高騰は凄まじい。^(注11)また消費者の人気にしても、「白札」の評判はあまり良くなく、後発の「角瓶」が好評であったのは前述のとおりである。ただし、「白札」がその後も受け容れられずに、ずっと不人気だったとは思えない。現在も「白札」が「ホワイト」として販売されているのを見てもわかるように、「白札」にも一定数の需要があつて、今に続いているのである。「角瓶」^(注12)に比べて安価なのが需要がある理由かもしれないが、とはいえ他のアルコール飲料と比べれば「白札」はやはり高価であり、それでも「白札」を求める消費者というのは、「角瓶」にはとても手が届かないが、せめてその下の「白札」を、というニーズなのだろう。この当時の「白札」「角瓶」それぞれの愛飲者の証言を見つけないことが出来なかつたので推測になるが、「白札」はサントリイウキスキイとしては安価だが、そうはいってもかなり高級な酒、「角瓶」は更にその上のステイタスをもった超高級酒というイメージがあつたのではないか。^(注13)つまりこの時代、「サントリイ級」の「ウキスキイ」というだけで、かなりグレイドの高い酒だったのだろう。

太宰治と「ウキスキイ」をめぐる物語

太宰の伝記的側面から「親といふ二字」「親友交歓」を考えた場合、次の井伏宛書簡が重要になる。本稿ではこの書簡を「井伏宛書簡B」とする。

B 【昭和二十年十一月二十三日 青森県金木町 津島文治方より 広島県深安郡加茂村井伏鱒二宛】

…(前略)…新聞小説はじめてみたら、思ひのほか面白く無く、百二十回の約束でしたが、六十回でやめるつもりです。…(中略)…

読む本が無いので淋しく思ひます。先日、この町のお寺の住職のところへ遊びに行き柳多留を借りて来て、二、三日は面白かったが、それもつまらなくなりました。

文治氏、いよいよ代議士立候補の様子ですが、何せ半病人みたいで、かぜを引いてばかりゐます。どうなる事ですか。…(中略)…

次兄の英治が、これまた病気で、弘前の病院に入院してゐます。文治氏も心細いでせう。次兄は、かなり病気がすすんでゐるのです。結局バカな、不思議なくらゐ役に立たぬ修治サン(引用者注 太宰の本名)だけ丈夫で、闇酒を飲んでゐるといふ按配です。

中畑氏は自由経済になつたので、少しく元気が出て、闇煙草、闇ウキスキイなど、太宰先生に補給してゐます。中畑さんのウキスキイは、なかなか高い。しかし、中畑さんの言によれば、太宰先生のために八方奔走してやつと入手するのださうです。私は大いに感謝の意を表して、郵便局に貯金をおろしに走ります。…(後略)…

この「井伏宛書簡B」には、「住職のところへ遊びに行き柳多留を借りて来て」「文治氏、いよいよ代議士立候補」など、当時の太宰の身辺のことが書かれており、これらは「親といふ二字」「親友交歓」にも描かれている事柄である。「新聞小説はじめてみたら」とあるが、これは「パンドラの匣」で、昭和二十年九月二十三日の田中英光宛書簡に「稿料も一枚十円くらゐらしいから、まあ新聞小説としては、ほどよい条件だらうと思ひます」とあり、山内祥史氏の「年譜」(『太宰治全集13』筑摩書房、平成十一年五月)によれば「九月三十日、「作者の言葉」とともに、「パンドラの匣」二十回分八十枚近くを村上辰雄宛送付」とある。「パンドラの匣」は昭和二十年十月二十二日から昭和

二十一年一月七日まで『河北新報』で六十四回にわたって連載された。昭和二十年十一月二十一日の村上辰雄宛の書簡に「稿料もさつそく御手配下さつてありがたうございました、たしかに全部受取りました」とあり、六十四回で原稿用紙がおよそ二百五十六枚（一回あたり四枚）だとすると、一千五百六十円ほど手に入れていたことになる。

ところで、兄文治のもとに疎開していた太宰は文治に生活費を入れていたのであるか。あくまで推測だが、多分入れてはいないだろう。太宰は昭和十一年から月九十円の援助を文治より受けており、この疎開を期に援助の打ち切りを申し出たというのだから、^(注14)疎開中の食と住は「太宰はどのように予想していたかわからないが、私は金木にきて住もそれから食も本家の厄介になるとは考えていなかったが、奥の離れの一廓をあてがわれ、食事は本家の家族、といっても兄夫妻と小学生の二女、時々帰省する弘前中学生の長男の四人と、一緒に食前に向かうこととなった。兄にとつて、弟一家を遇するのには、これ以外のことは考えられなかったらうと私は後で気づいた」（津島美知子「疎開前後」『回想の太宰治』）のようにしてまかなわれた。以上から考えて、太宰は疎開中、兄に自分たち一家の生活費を入れなかつたらうと推測できる。なんのことはない、送金を辞退する代わりに一家丸ごと養ってもらっていたわけだ。となると、この二千五百円前後の原稿料とそれ以外にもあったであろう収入は、一体何に費ったのであろうか。いささか単純な推理であるが、「井伏宛書簡B」の傍線部、「闇ウキスキイ」につき込まれたのではないかと考えられる。

「井伏宛書簡B」で、太宰は中畑から「ウキスキイ」を購入していると認^{したた}めている。この中畑とは、北芳四郎と共に太宰の世話役を務めていた中畑慶吉^{けいきち}のことである。猪瀬直樹の『ピカレスク 太宰治伝』（小学館、平成十二年十一月）には「中畑慶吉という津島家出入りの商人、東京の地理に通じ同時に津軽の津島家の事情を知り尽くしたこの男は、長兄文治にとっては徳川將軍家の御庭番の役回りが期待されていた。中畑は、店を構えずに呉服の注文

を取る背負呉服を商いとし、仕入のために東京と青森を行ったり来たりしていた。彼が運ぶ商品は呉服のみではなく、些細でありながら知っておかなくてはならない情報も含まれていた」とある。特に太宰の上京（昭和五年）後は、文治の命を受けた中畑と北の二人が太宰の私生活の面倒を見た。この時期の太宰は、非合法運動のシンパ活動（昭和五年から非合法活動との絶縁を誓った昭和七年まで）、初代出奔の手引き（昭和五年）、鎌倉での心中未遂（昭和五年）、鎌倉山中での縊死未遂（昭和八年）、パビナル中毒での入院（昭和十一年）と荒んだ日々を送っており、東京にいる機会の多い彼ら二人がその度に後始末をした。そんな太宰を見かねて、井伏に太宰の結婚相手を探すよう助言したのも中畑と北であり、井伏家での太宰と美知子の祝言には、彼ら二人は津島家の名代として出席した。中畑はかなり親身になって太宰の面倒を見ており、金銭面だけに限っても、太宰のために相当散財している。^(注16)太宰は「中畑さんのウキスキイは、なかなか高い」と言うが、太宰と中畑のこれまでの間柄を考え合わせると、中畑がそうふっかけたとは思えない。当時の金木で手に入る闇の「ウキスキイ」の値段として「サントリイ級一本百円」「サントリイ級と称するウキスキイ一本二百円」は妥当なところだったのではないだろうか。とすると、百円乃至二百円により近い小売標準価格の「角瓶」が、太宰の言う「サントリイ級ウキスキイ」だったのではないかと思われるが、どうであろう。

大酒飲みの太宰はウイスキーが高騰し続けるのを見て、ある種の焦燥感に駆られたことだろう。この先も値上がりし続けるのは確実で、それならばいつそ今のうちにまとめ買いをした方が得だという理屈から、買いためを考えたい。私は大いに感謝の意を表して、郵便局に貯金をおろしに走ります」と言うくぐりは、「親といふ二字」では次のような心理描写となっている。

それからまもなく、こんどは私が、えい、もう、みんな飲んでしまはうと思ひ立つた。…（中略）…とにかく

その金は、何か具合ひの悪い事でも起つて、急に兄の家から立ち退かなければならなくなつたりした時に、あまりみじめな思ひなどせず、にすむやうに、郵便局にあづけて置いたものであつた。ところがその頃、或る人からウヰスキーを十本ばかりゆづつてもらへるあてがついて、そのお禮には私の貯金のほとんど全部が必要のやうであつた。私はちよつと考へただけで、えい、みんな酒にしてしまへ、と思つた。あとはまたあとで、どうにかなるだらう。どうにかならなかつたら、その時にはまた、どうにかなるだらう。

「親といふ二字」には「えい、もう、みんな飲んでしまはうと思ひ立つた」とあるが、そう「私」が「思ひ立つた」事情や経緯については触れられていない。触れられているのは「貯金のほとんど全部」を「ウヰスキーを十本ばかり」に換えてしまった後の運命を、後は野となれ山となれ式に気にかけていることのみである。一方、太宰の書簡では「中畑さんのウヰスキーは、なかなか高い」という愚痴だけで、そのような逡巡は見られない。このような違いはあるにせよ、ウヰスキー購入の資金を下ろすために太宰が郵便局に行ったことは書簡から明らかで、そこで実際に「爺さん」とのやりとりがあつたかどうかはともかくとして、これらのことが素材となり「親といふ二字」が書かれたのは間違いあるまい。ただ、美知子の「とりつけの酒屋の主人は「奥さんがたいへんだ」と同情してくれたが、べつに米代を飲んでしまうわけではないし、勤め人の家庭と同じように考へて同情されるとかえつて迷惑を感じた」（『三鷹』『回想の太宰治』）との回想があるように、「親といふ二字」の「私」は太宰をモデルとしているが、当然ながら戯画化された「私」であつて、相当無理な算段をしたにせよ、実際に太宰が有金全てをはたいてウヰスキーを買つたとは思えない。

【昭和二十一年九月十二日 青森県金木町 津島文治方より 高田市寺町二丁目 善導寺方 小田嶽夫宛】
拝復 私もいろいろとお話したい事ばかりで、「小田さんが遊びに来るといいね」と女房に愚痴を言つたり

してゐます。ウイスキーを一ダースばかり確保してゐたのですが、村のお百姓に持つて行かれ、面白くない氣持です。…(後略)…

「親友交歓」は「昭和二十一年の九月のはじめに、私は、或る男の訪問を受けた」で始まる。この小田嶽夫宛の書簡の日付「昭和二十一年九月十二日」は、「親友交歓」の素材となる出来事が太宰の身边で起きたことを、伝記的事実の面から裏付ける資料になりそうである。また、先述のとおり、「親友交歓」には「私はこのウイスキーを、かなり前にやつと一ダースゆづつてもらひ」との記述があり、「ウイスキー」の本数もこの書簡の傍線部と合致する。この事件に関して、美知子は「犬の毛皮を背負った山人姿で訪れた旧友があつた。その方は何か一言、過去のことでも聞きたくない言葉を太宰に浴びせた。私にはよく聞きとれずその場の空気で察しただけであるが、その一言が『親友交歓』を書くきっかけになつたのだと私は、ひとり決めしている」(「疎開前後」『回想の太宰治』)と書いており、「親といふ二字」同様、「親友交歓」も太宰の実生活を素材にして書かれたものであろう。

「親友交歓」を河盛好蔵に送った旨の書簡が残っている。

【昭和二十一年十月二日 青森県金木町 津島文治方より 東京都牛込区矢来町七一 新潮社「新潮」編集部

河盛好蔵宛】

拝復、ただいま別封速達書留で、拙稿四十一枚御送り申しました。タッチが荒すぎはしなかつたかと、非常に気になります、とにかく、恥づかしい氣持ちで一ぱいです、でも、陳腐でだけはないつもり、など、みじめな負け惜しみを言つてゐます、何卒よろしく御願ひします、／不盡、

さて、これまで見てきたデータで、太宰と「ウイスキー」をめぐる物語を総括してみよう。太宰が「パンドラの匣」で得た原稿料がおおよそ二千五百円、小田嶽夫宛書簡によると「確保してゐた」「ウイスキー」が約「一ダース」

である。「井伏宛書簡B」の昭和二十年十一月頃に、「竹村宛書簡」の「一本二百円くらゐ」で「ウキスキイ」を「一ダアス」購入したとすると、12本×200円＝2400円となり、ちょうど「パンドラの匣」の原稿料で「ウキスキイ」「一ダアス」分が購^{あがな}える計算になるわけだ。となると、太宰と「ウキスキイ」をめぐる次のような物語が成立しそうである。

郷里に疎開していた太宰は、高級品である「サントリイ級」の「ウキスキイ」を中畑より闇値で購入していた。それは「角瓶」であったと思われる。諸物価高騰のなか、「ウキスキイ」も高騰を続け、戦後すぐの頃は闇で一本百円で買ったものが、同年十一月頃には倍の二百円になっていた。「角瓶」の小売標準価格の上昇の仕方から考えて、闇値はまだまだこれから先も上がり続けるであろう。太宰にとって酒はなくてはならないものであり、普段飲む分にはリンゴ酒^(注17)でも構わないが、そればかりでは味気ないし体裁も悪い。これ以上「角瓶」が値上がりする前に、まとめ買いた方が後々得ではないかと太宰は考え始めていた。そんな折りの十一月半ば、新聞連載していた「パンドラの匣」の原稿料として二千五百円前後が送金される。この金があれば「角瓶」が「一ダアスばかり」買えそう^だ。それに、この金で「ウキスキイ」を買ったところで、当面、家族を飢えさせる心配はない。そう考えて「ウキスキイ」の購入資金を下ろすために太宰は郵便局に行った。この郵便局へ「ウキスキイ」代を下ろしに行った時の体験を素材に書き上げられたのが「親といふ二字」十枚（山内祥史氏の調査によると、昭和二十年十一月中旬頃までに脱稿）である。大枚はたいて手に入れた「秘藏」の「ウキスキイ」を押し入れにしまい込んで、大事に楽しんでいた太宰のもとに、「犬の毛皮を背負った山人姿」の「旧友」がやって来た。そこでの詳しいやりとりは不明だが、どうもその「旧友」は「何か一言、過去のことと聞きたくない言葉を太宰に浴びせた」らしい。そして、とうとう太宰は「秘藏」の「ウキスキイ」を「持つて行かれ」てしまい、「面白くない」思いをする羽目になってしまっ

た。こちらを直接の素材として書かれたのが、「親友交歓」四十二枚(同じく、山内祥史氏の調査によると、昭和二十一年十月二日までに脱稿)である。これら二作品の原稿料が太宰に何本のウイスキーを恵んだか、はたまたその甘露が彼の胸中の鬱憤を払ってくれたか、ともに定かではない。

(補考) — 二作品の発表時期について —

太宰の伝記的な側面から「親といふ二字」「親友交歓」の素材となった出来事を探り、「太宰と『ウイスキー』をめぐる物語」を提示した。それらの素材を太宰が小説に仕立てる際の、いかにも彼らしい工夫、仕立てる際に「細工は流々、仕上げをご覧しろ」とばかりに最後に加えた一鑿^{のみ}、仕上げに置ける名工の腕の見せ所を見て、本稿を結びたい。

疎開中の執筆あるいは、津軽を舞台にしているため、郷里では『親友交歓』や『母』のいわゆるモデル論議が行われているらしい。われからモデルは自分だ、と名乗りを上げた人もある。犬の毛皮を背負った山人姿で訪れた旧友があった。その方は何か一言、過去のことと聞きたくない言葉を太宰に浴びせた。私にはよく聞きとれずその場の空気です察しただけであるが、その一言が『親友交歓』を書くきっかけになったのだと私は、ひとり決めしている。…(中略)…事実の記述ではなく、太宰の主観的事実がいくつか合成され、フィクションでふくらまされて小説になっているのだが、読者はそのまま事実と受けとるばかりか、よく書かれてもいない人物のモデルは自分であると、名乗り出る人まであるのは、どのような心理からだろう。

(津島美知子「疎開前後」『回想の太宰治』)

先にも一部分引用したが、今度は傍線部に注目してみよう。冒頭でも触れたが「親といふ二字」が発表されたのは、昭和二十一年一月であり、この時、太宰はまだ金木に疎開中である。有元伸子氏は「『親といふ二字』論―太宰流・人情噺の創作―」（『太宰治研究14』和泉書院、平成十八年六月）で、「『親といふ二字』は、太宰が、落語、とくに人情噺を意識しながら創作した短編小説」であるという。私こそ「親といふ二字」の「爺さん」だと名乗り出た御仁ごじんがいたかどうかはわからないが、もし出て来たとしても、有元氏の指摘にもある通り、この小説はいいお話の「人情噺」なので、モデルにされた本人もそう悪い気はしないだろう。

一方、「親友交歓」というと、「好いところが一つもみぢんも無かつた」というふうには、その人物は相当辛辣に描かれている。普通に考えれば、モデルにされた本人はかなり気分を害するにちがいない。同じ町内にいるならば、すぐさまねじ込まれて面倒なことになる事態も覚悟すべきだろう。ただ、「親友交歓」が発表されたのは昭和二十一年十二月であり、太宰は十一月十五日にはもう三鷹の家に戻っている。金木の生家にねじ込まれたところで、兄の文治らが迷惑するだけで、東京にいる太宰自身は、直接の被害を免れるというわけだ。太宰は、したたかに発表時期も計算に入れて、「旧友」に仕返しをしたのではなからうか。

注

(注1) 太宰の酒に関する逸話は枚挙に遑いとまがない。一例として、甲府に疎開していたこの当時のものを挙げると、昭和二十年六月の下旬、訪ねてきた田中英光と四日四晩飲み続けて、生葡萄酒を二斗飲み干したという。

(注2) 「月日不詳」となっているが、「井伏鱒二・太宰治 往復書簡」(【特集】太宰治歿後五十年)『新潮』新潮社、平成十年七月)を参照すると、昭和二十年八月二十八日の井伏の太宰宛書簡の返事がこの書簡であると考

えられる。書簡の内容から見ても、太宰が戦後、井伏に出した最初の書簡であることには間違いない。また、昭和二十年十月七日の井伏宛書簡に「けふお便りに接し、何はさて置き、御返事に取りかかりました。御手紙の日附は、九月二十六日になつてゐますが、けふは十月七日です、十日間もかかるのですからね。この私の手紙もそちらへ着くのは、十月末でせう。もどかしい限りです」とあるところから推測して、昭和二十年八月二十八日の井伏書簡が太宰の手元に届いたのは九月七日以降のことであろう。ということはこの「月日不詳」の書簡が書かれたのは九月の中旬頃のことと考えられる。

(注3) 太宰は国産ウイスキーの意味で「サントリイ級」としているのである。太宰にとってサントリイウイスキーが国産ウイスキーの代表的銘柄として意識の中にあつたことは間違いない。ただ、ここでは数あるサントリイウイスキーの銘柄の中で、太宰の念頭にあつたのはどの銘柄かを考えていきたい。また昭和十六年から終戦まで、ウイスキーの輸入が禁止されていたとのことだが調査しきれなかった。また、当時「壽屋」と並ぶ日本のウイスキーメーカーに「ニツカ」があるが、「壽屋」と「ニツカ」のどちらが広く愛飲されていたかも調査しきれなかった。資料等があつたら是非ご教示頂きたい。

(注4) 社外でも、鳥井信治郎の友人だった、当時味の素の鈴木三郎助、東洋製罐の高碓達之助らがウイスキー造りを思いとどまるよう助言したという。

(注5) これまで「角瓶」はこの商品の愛称であつて正式名称ではないとされてきたが、サントリイお客様センターに問い合わせたところ、発売当初から社内で「角瓶」と呼ばれており、正式名称も「角瓶」であるという回答を得た。ただ本稿の最後にも記したとおり、当時はあまり正式名称にこだわらなかつたらしい。

(注6) 実際に発売されたのは昭和二十五年であつた。よつて、太宰はオールドを口にしていない。

(注7) 「日本の海軍はイギリスの仕込みだから、ウイスキーに親しむ機会が多い」(日々新たに―サントリー百年誌) サントリー株式会社、平成十一年十月) 「そのうち父が戦死した年齢に近づいた。海軍だから占領地でも、ウイスキーには不自由しなかっただろう」(佐木隆三「ウイスキー」『値段の明治大正昭和風俗史 上』週刊朝日編 朝日新聞社、昭和六十二年三月)

(注8) 他に将校用の「レアオールドウイスキー」があった。

(注9) 本文でも触れたが、むしろ昭和二十一年四月に発売された「トリス」が統一的なサントリーウイスキーのイメージを作り出し、定着させた。「親友交歓」の発表は昭和二十一年十二月なので、当時の読者は「トリス」を思い浮かべたかも知れない。

(注10) 「白札」のデータは『値段の明治大正昭和風俗史 上』からの抜粋。「角瓶」のデータはサントリーお客様センターに問い合わせたデータを入手した。「白札」は七百二十ミリリットル。「角瓶」は発売当時七百三十三ミリリットルで、昭和十八年に七百二十ミリリットルに変更される。

(注11) サントリーお客様センターによると、この小売価格の改定は酒税改定のためとのことである。

(注12) 参考までに『値段の明治大正昭和風俗史 上』より、大正十五年(昭和元年)から戦後くらいまでの日本酒・ビール・焼酎、それに白米の価格を次に挙げる。尚、日本酒は並等酒一升、ビールは大瓶一本、焼酎は乙類一升、白米は東京における標準価格米十キログラム当たりの小売価格である。ただし、日本酒に関しては、昭和十九年から昭和二十二年の間に段階的な値上げがあったものと思われる。

| | | | | | | | |
|--|---|-------------|---------------------------------|-----------------|---------------|----------------|----------|
| 昭和二十二年 五百円 | | | 昭和十九年 八円 | 昭和十五年 一円九十銭 | 昭和九年 一円 | 昭和二年 九十八銭 | 日本酒(並等酒) |
| 昭和二十二年 五十九円六十一銭 | 昭和二十一年 六円 | 昭和二十年 二円 | 昭和十九年 一円三十銭 | 昭和十四年 四十一銭 | 昭和八年 三十三銭 | 昭和三年 四十一銭 | ビール |
| 昭和二十二年 五百五円 | 昭和二十一年 十円五十銭 | 昭和二十年 八円 | 昭和十九年四月 五円 同年十二月 五円四十銭 | 昭和十五年 二円二十五銭 | 昭和九年 一円二銭 | 昭和元年 八十一銭 | 焼酎 |
| 昭和二十二年七月 九十九円七十銭 同年十一月 百四十九円六十銭 | 昭和二十一年三月 十九円五十銭 同年十一月 三十六円三十五銭 | 昭和二十年 六円 | | 昭和十四年 三円二十五銭 | 昭和八年 一円九十銭 | 大正十五年 三円二十銭 | 白米 |

(注13) 昭和十二年の「角瓶」発売当時は、理化学研究所が「理研ウキスキー」を一円九十銭で、寶酒造株式会社が「寶ウイスキー」を六十銭で販売していた。これに比べれば、サントリーウイスキーは相当高価である。また、当時は出所のあやしいウイスキーがかなり出回っていたという。

(注14) 井伏鱒二の「太宰治と文治さん」(『太宰治』筑摩書房、平成元年十一月)に「太宰君の亡くなったあとで未亡人から聞くと、戦争で太宰君が甲府に疎開して津軽に再疎開するまで送金が続いてゐたさうだ」とある。

(注15) 北芳四郎は津島家に入入りしていた商人で、中畑と行動を共にして太宰の面倒を親身になって見た、いわば太宰にとつての恩人である。しかし、津島家に累が及ばぬよう太宰の分家除籍を文治に勧めた(昭和五年)、パピナル中毒の昂進した太宰を東京武蔵野病院に入院させる際、主導的な立場を果たした(昭和十一年)、太宰を無為に過ごさせている長尾良ら取り巻き達を蹴散らし(昭和十二年)、結婚式の席上でその取り巻き達のことを「有象無象」と呼び放った(昭和十三年)等のエピソードがあり、憎まれ役を務めることが多かったらしい。「人間失格」の「ヒラメ」は北がモデルと言われている。

(注16) このあたりの経緯は、中畑慶吉「女と水で死ぬ運命を背負って」(『新文芸読本 太宰治』河出書房新社、平成二年)に詳しい証言がある。

(注17) 昭和二十年十月七日の井伏鱒二宛書簡に「こちらは、リンゴ酒なら、人にたのめばいくらでも入手できるやうですが、この土地の人は、リンゴ酒をばかにして、あまり飲まないやうです。そんなに皆からいやしめられてゐるリンゴ酒を私だけがつかつ飲んで呆れられるといけませんから、私も、がまんしてゐます。甲府のブドウ酒よりも、具合がいいのですがね」とある。

※本稿は『太宰治をおもしろく読む方法』（山口俊雄編 風媒社、平成十八年九月）のコラム「巧まぬ連作―「ウイスキー」の来方行末―」を大幅に加筆修正したものである。サントリーウイスキーの発売当時の正確な商品名は、現在サントリーにも資料が存在せず不明である。戦前には正式名称に対するこだわりはさほど無かつたらしい。よって、サントリーウイスキーの商品名は「日々新たに―サントリー百年誌」の表記に従った。また、サントリーウイスキーの歴史に関しても同書に負うところが大きい。

サントリーお客様センターの方々には「角瓶」の小売標準価格のデータを始め、様々にお力添えを頂きました。この場を借りて謝意を申し上げます。